

平成23年度

奈良県公立学校優秀教職員
表彰実践事例集

平成24年1月

奈良県教育委員会

目 次

【小学校】

学習指導の部

- 1 地域を教材とした、児童の思いを中心に据えた世界遺産学習について
～平城遷都1300年祭を通して～
奈良市立飛鳥小学校 松浦 慎 1
- 2 活用する力を高める授業実践 ～算数科の学習を通して～
斑鳩町立斑鳩小学校 柴田 浩司 3
- 3 自分の思いや考えを意欲的に表現できる児童の育成 ～書く力を高める指導を通して～
曾爾村立曾爾小学校 城之内 善博 5
- 4 自ら考え 学び合う算数学習
橿原市立畝傍北小学校 森 清美 7
- 5 なかまとともに運動を楽しみ、心と体をひらく体育学習を通して
橿原市立畝傍南小学校 前田 善彦 9

生徒指導の部

- 6 より多くの目で子どもたちの指導を ～教職員間の共通理解を大切にする生徒指導～
桜井市立安倍小学校 米田 紘子 11
- 7 「学習指導の充実」と「学校生活の安定」に取り組んで ～小規模校の特性を踏まえて～
大和高田市立土庫小学校 中本 剛史 13
- 8 子どもの実態から始める生徒指導・学級経営について
五條市立牧野小学校 杉崎 栄一 15

特別支援教育の部

- 9 生きる力を培う通級指導教室を目指して
平群町立平群東小学校 山本 佐江美 17

学校教育目標の具体化の部

- 10 いきいきと活力ある学校を目指して ～教務主任として組織マネジメントを考える～
田原本町立田原本小学校 瀬川 幸子 19

【中学校】

学習指導の部

- 11 自律的な学習者を育てる家庭学習の在り方
奈良市立平城東中学校 川淵 弘二 21

生徒指導の部

- 12 「開発的・予防的」生徒指導の実践
生駒市立鹿ノ台中学校 奥川 長希 23

学校体育の部

- 13 教科体育及び学校行事（＝健康安全・体育的行事）を通しての集団づくりについて
吉野町立吉野中学校 坂口 庄一 25

【高等学校】

学習指導の部

- 14 Brush up Time（忘れかけている知識を復習する時間）の取組について
県立二階堂高等学校 岡本 雅至 27

学校教育目標の具体化の部

- 15 情報工学科の特色ある学科づくりについて
県立奈良朱雀高等学校 村田 敬史 29

国際理解教育の部

- 16 教務部長としての取組について
県立高取国際高等学校 藤本 秀樹 31

【特別支援学校】

特別支援教育の部

- 17 奈良西養護学校におけるセンター的機能について
～特別支援教育コーディネータ委員会の取組より～
県立奈良西養護学校
特別支援教育コーディネーター委員会 33

分野番号1 小学校 学習指導の部

地域を教材とした、児童の思いを中心に据えた世界遺産学習について ～平城遷都1300年祭を通して～

奈良市立飛鳥小学校 教諭 松浦 慎

1 実践内容

(1) 実践のねらい

- 奈良の文化の素晴らしさを知り、大切に守り、伝えていこうとする心情を育てる。
- 文化財にかかわる人の思いに触れ、文化財を尊重する態度を育てる。
- 現代的な課題について、友達と協力して意欲的に調べ、学び、発信する力を育てる。



(2) 実践のポイント

- ① 観光ボランティアガイドと連携した小グループによる学習（1学期）
- ② 地域に根ざした「本物」との出会い（2学期）
- ③ 旬の素材を生かす。（3学期）
- ④ マスメディアを活用する。（3学期）

(3) 実践の概要

○ 学習の流れ

- ・ 1学期…「世界遺産についての取組」

実際に世界遺産を見学し、そのものがもっている

価値に触れる。ボランティアガイドさんの出会いを大切に、お礼の手紙などを書く。ボランティアガイドさんの熱い思いを大事にし、2学期の活動につなげる。

- ・ 2学期…「世界遺産のための取組」

世界遺産に携わる方の話を直接聞き、その方の奈良に対する思いや、子どもたちへの願いを知る。お願いの手紙→話を聞く→まとめる→お礼の手紙を書く、というサイクルを繰り返すことで、子どもたちの社会対応能力の定着を図った。

- ・ 3学期…「世界遺産を通しての取組」

1300年祭についてもっと知りたいという児童の思いから、1300年祭について新聞を用いたり（NIE）、パンフレットから読み取ったりして情報を集め、概要を理解した。「自分たちの住んでいるところで行われている祭りなのに、何もしなくていいのか」、「自分たちで、来る人もする人も楽しめる企画を考え、1300年記念協会に提案してお祭りを盛り上げよう。」と投げかけ、そこから「平城遷都1300年記念プロジェクト」を展開した。「新しいアイディアは既存のアイディアの組み合わせである」という考えのもと、マインドマップなどの手法を学びながら様々なアイディアを出し合い、実現可能な形にしていった。また、プレゼンテーションについてもオリジナルのマニュアルを参考にして、より効果的な表現方法を模索しながら取り組んだ。グループ学習を取り入れたことで、児童は積極



的にコミュニケーションを取り合い、切磋琢磨してよりよいものを創っていた。そして、実際に1300年記念協会、毎日新聞社の記者、奈良ドットFMのMC、教育委員会の指導主事、校長、保護者をお招きして「プレゼンテーション大会」を開催した。発表の様子は新聞に取り上げられ、保護者や地域にも広く伝えることができた。

2 成果及び課題

- 学校外の機関を発表対象とすることや、実際に実現するかもしれないという期待をもたすことで、児童のやる気を喚起した。また地域参画し、「共に地域を創る」という視点をもつことができた。
- 実践を通して情報収集・企画・プレゼンテーションについて深く学んだことで、他教科においても積極的に発信する姿勢が身についた。
- アンケートから、児童の中には、世界遺産の価値について、「協力するきっかけを与えてくれるもの」「昔の人たちの未来へのメッセージ」「かけがえのない宝物」というように、概念的なところに踏み込んでいる者もいた。
- 板書計画など事前にデジカメで取り、担任間で共有して進めたため、クラスが異なっても、ほぼ同じようなアプローチができた。年間計画をきちんと立て、毎時間ごとに打ち合わせとフィードバックを行い、学年として一貫したアプローチを行うことで、学年集団が一致団結して臨むことができた。

※ 次年度は、前年度を受けて、「創る」という視点を意識した。世界遺産や地域に残る素晴らしいものを「つなげて」いくことも、「伝えて」いくことも大事であるが、出発点は誰かが「創った」のである。自分たちは「創る」主体であるということを見せようと思った。世界遺産の修復などで世界的に有名な飛鳥建設社長・石工の左野勝司氏の生き方に着目した。小学校区に住み、世界遺産と深くかかわる左野氏の思いを受け継ぎ、自分たちのこれからの生き方の糧にしてみようと思った。ゲストティーチャーとしてお招きし話をさせていただいた。「せっかく出会えたのも何かの縁、石と一緒に何か創ろう」との提案から、「飛鳥小学校未来遺産プロジェクト」を展開した。「石」の特性を調べ、実際に石でできたものを探した。広島の修学旅行でも石造物への注意を促したり、校区内の遺産、頭塔を見学したりして、「石」との出会いを豊かにした。その中で、「石」には「意志」が込められていることに気づかせた。そこで、「石」に込める想いを考え、その形、置き場所などを総合的に考えてグループでまとめ、企画を作って左野氏に提案した。

この「石」のモニュメントは卒業記念制作（飛鳥希望の塔）につながった。最後には、今までお世話になった地域の方々や保護者をお招きして、6年間の集大成と感謝の気持ちを詰め込んだ「飛鳥未来遺産完成記念式典」を行うことができた。



3 その他参考となる事項

奈良市立飛鳥小学校Webページ <http://www.naracity.ed.jp/asuka-e/>

分野番号1 小学校 学習指導の部

活用する力を高める授業実践 ～算数科の学習を通して～

斑鳩町立斑鳩小学校 教諭 柴田 浩司

1 実践内容

教育課程実施状況調査や国際調査によると、「基礎・基本」の学力低下には、歯止めがかかったと見られる結果が出ているが、PISA調査における数学的リテラシー（数学活用能力）は、依然低い傾向にある。また、全国学力・学習状況調査のB問題のような思考力、判断力、表現力等を問う読解力や記述式の問題には課題があるとされている。新しい学習指導要領でも「言葉や数、式、図、表、グラフなどの相互の関係を理解し、それらを適切に用いて問題を解決したり、自分の考えを分かりやすく説明したり、互いに自分の考えを表現し伝え合ったりすること」などの指導の充実が述べられている。



日常生活において、算数科で学習した内容を活用する場面は非常に多いし、身につけた知識、技能を生活や学習等で活用できるようにすることは、算数科において育てたい能力の一つとして挙げられる。そこで、単元の導入や単元を学習した後の発展問題として、日常生活に関連のある問題を考え、授業実践を行い算数科の授業研究を進めた。以下、その授業実践事例の概略について述べたい。

(1) 3年 余りのあるわり算

3年生の除法のまとめとして、学校行事である「給食バイキング」の場面を設定し、余りがいくつになるのかや一人いくつずつに分けられるのかを考え実際に食べ物シールをお皿に貼りながら分けていく模擬体験の学習を取り入れ、積極的に除法を使う活動をさせた。できるだけ余りを少なくするにはどの食べ物（何個入り）を選べばいいのかをグループで相談し協力しながら学習を進めた。



<「給食バイキング様子」活動の様子>

日常生活の場面を設定したバイキングゲームをすることで、進んで問題を解決しようとする姿が見られ、見通しをもって問題を解決することができた。

(2) 5年 小数のかけ算

体育の時間に学習した「走り幅跳び」を教材化し、小数のかけ算を使って自分の目標記録を計算し、目標記録にどれだけ迫ることができたかをポイントによって表し、順位を決める学習を取り入れた。この問題を解くには、立ち幅跳びの記録を1.7倍して走り幅跳びの目標記録を設定し、実際に跳んだ記録を引いてポイントを計算しなければならず、小数のひき算の技能やmとcmの単位換算も必要となってくる。子どもたちは体育の授業で走り幅跳びの学習をしており、自然と問題の意味が理解できたようである。また、走り幅跳びの記録から、児童の考えを説明させる問題にも取り組んだ。

(3) 5年 分数のたし算とひき算

「分数のたし算とひき算」の学習の導入として、1枚のピザを何等分すると同じ分量になるのかを考える問題に取り組みさせた。この問題は、4人で1枚の円いピザを分ける時、何等分して1人何個ずつ食べると同じ分量になるかを考えさせ、子どもたちの意見から間違った考えを見つけ出し説明させるものである。

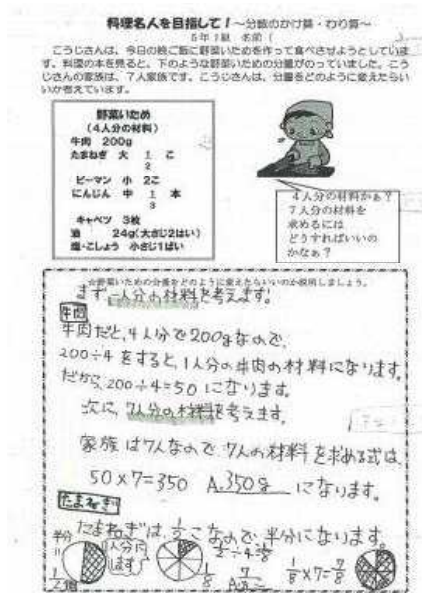
「時間を分数に表す」教材では、「45分は□時間か？」という問題を、時計の目盛りを活用することから考えさせた。子どもたちから「5分ごとと区切ると12個に分けた内の9個分だから $\frac{9}{12}$ 分の9時間だ」「1分ごとにも区切ると60個の内の45個分だから $\frac{45}{60}$ 分の45時間だ」「3分ごとにも区切れそう」「4分ごとだと区切れないな」「45分と60分、どちらも区切るためには、45と60の公約数じゃないかな」など色々な意見が出された。日常生活に欠かせない時計から、分数には様々な表現の仕方があることを見付け出し、「約分・通分」の学習へとつなげていった。

(4) 5年 分数のかけ算とわり算

料理レシピ（4人分の材料）から1人分の材料や家族の人数分の材料を計算によって求めていく学習を考え取り入れた。家庭科の調理実習とも関連付けて考えさせることで、日常生活に活用できる算数を意識して授業に取り組みさせた。

(5) 6年 線対称・点対称

「線対称・点対称」の学習の後、家庭学習として、自分の身のまわりで線対称や点対称になっているものを見つけだし、それを絵にかいたり写真で撮ったりし、みんなに紹介し合う学習を取れ入れた。学習した内容を実生活に目を向けさせ考えさせることで、日常生活に潜んでいる算数的なおもしろさを児童に感じさせることができた。



「料理名人」児童のワークシートより

2 成果及び課題

日常の事柄や場面の問題を自分なりの表現で数学的に解決させていくことで、今後の学習や生活に生かせ活用できる学力を身に付けさせたいと考え取り組んでいる。各単元の導入やまとめで、日常生活に関連のある内容を意図的に取り入れ考えさせることで、子どもたちは、主体的に問題に取り組んでいた。児童の感想にも、「今日の算数はおもしろかった」「身の回りの問題なので、イメージしやすかった」「〇〇も線対象かなあ」など、算数のおもしろさや日常生活を算数的な目で見ようという態度も備わってきた。まだまだ、全体での発表の仕方や説明する力は弱いですが、今回のような問題解決学習を算数科の各単元の中で続けていくことで、発表し説明する力もついていくのではないかと考える。現実性のある算数の授業により、算数への興味関心を高め、算数を学ぶ意義や楽しさも児童が感じ、算数好きの児童が増えてくれればと考えている。

3 その他参考となる事項

斑鳩町立斑鳩小学校Webページ <http://ikaruga.kir.jp/>

分野番号1 小学校 学習指導の部

自分の思いや考えを意欲的に表現できる児童の育成 ～ 書く力を高める指導を通して ～

曾爾村立曾爾小学校 教諭 城之内 善博

1 実践内容

本校の研究主任として、昨年度より「書く力を高める指導」に焦点を当てた研究テーマにして、3年間の計画を立てて研究を推進している。



(1) 系統的な指導のための学年別系統表・研究構想図の作成

児童の意識調査や県国語学力診断の結果分析を行い、書く力を高めるための「学年別系統表」を作成した。「課題設定や取材」「構成」「記述」「推敲」「交流」の各段階で指導すべき事項を職員間で共通理解できた。6年間で付けた力が明確になり、学校として指導のつながりが生まれた。また、本校では書く力を高めるために「国語科の授業をどう改善するか」「国語科の学びをどのように生かしていくか」「言葉の基礎的な力をどのように高めるか」を常に確認しながら研究を進めた。そして、発信・説明ができるよう研究構想図にまとめた。

(2) 校内研修の充実と指導法の提案

児童の作文を持ち寄って実践交流をしたり、講師を招いて理論や事例を学ぶ研修を積極的に設定した。また、研究授業を通して、電子黒板を活用した授業展開例や書画カメラを用いた作品交流の方法を提案した。その結果、教師間で機器の活用法や実践事例の交流が日常的に行われるようになった。

(3) 書いた作文を認め合う場の工夫 ～全校スピーチ集会「いきいきタイム」の実施～

感想が活発に出され、発表者が話してよかったと思える集会を目指した。まず、発言時のルールを重視し、「はい・立つ・です」を合言葉として「返事をして、姿勢よく立ち、語尾まで話すこと」を徹底させた。また、6年生に「感想発表のポイント」「アドリブを交えた集会の進行法」について指導し、集会をリードする意識を持たせた。上級生を手本として学び合う集会になってきた。



(4) 書く力を高めるための実践事例 ～ふるさと学習を充実させることから～

書く素材を充実させるため、総合的な学習の時間を中心に、郷土の「人」「自然」「文化」「歴史」に課題を求め、体験・交流学习や表現活動を多く取り入れた。

① 曾爾ふるさと塾

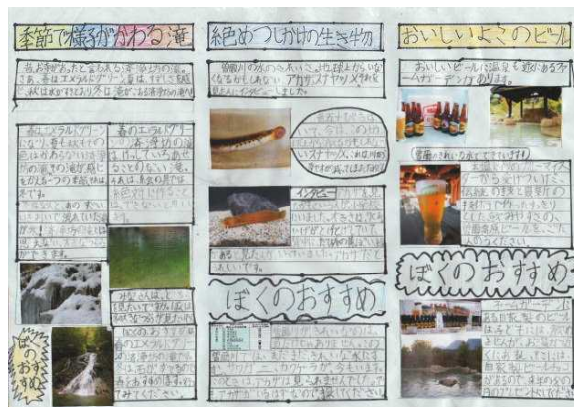
学期に一度、村の発展に尽力されている人、努力を重ねて夢をかなえた人などをお招きし、お話を聞いたり、質問や感想を発表したり、技に挑戦したりする交流会を開いた。交流会後の感想文やお礼の手紙には、ふるさとに誇りをもち、愛着を感じている気持ちが表れていた。

② パネルディスカッション「50年後の曽爾村」

インターネットでの調べ学習や聞き取りをもとに、50年後の曽爾村を予測する文を書き、パネルディスカッションを行った。討論で考え方や見方が深まり、更に説得力のある予測文に書きかえることができた。完成した予測文は副村長の前で発表し、高評価を得て自信を深めた。

③ 曽爾村のよさをPRしよう ～わが村おすすめガイドを作ろう～

都市部の6年生とビデオレターやパンフレットでの交流を行った。同学年児童に曽爾村のよさをPRするという事で、目的・相手意識が明確となり、作品の創作意欲が高まった。村のよさを再認識したり、同学年児童からの感想で達成感を得たりする機会となった。



④ 蘇いの森訪問

社会福祉施設「蘇いの森」を訪問し、お年寄りに平和学習で学んだことを劇や電子紙芝居にして発表した。大きな拍手を何度もいただいたり、涙を流して見てくださったりして、子どもたちは人に喜んでもらう心地よさを味わうことができた。発表後には戦争体験を聞かせていただき、分かったことや心に残ったことを壁新聞の形にまとめた。

2 成果及び課題

(1) 子どもの顔つきに自信が見られるようになった

作文を交流する機会を多く持つことにより、学び合いが生まれ、回を重ねるたびに興味深い内容になってきた。発表に対して友達から多くの感想をもらい、文章を書き・聞いてもらうことに自信をもつようにもなった。この自信を教科学習や特別活動などの学びや活動に広げていきたい。

(2) 地域の方や保護者から好評が寄せられた

保護者参観・学校評議員・オープンスクールなどの様々な機会に、「あいさつを大きな声でしている。」「作文発表は分かりやすく上手だった。」「児童の司会がとてもよかった。」「どんどん手を挙げて感想が言えていた。」など、おほめの言葉をたくさんいただいた。表現力の向上が学校生活に活気を生み、学校に対して信頼感が高まっていくのを感じた。

(3) 研究実践の手応えがつかめた

職員が一丸となって、手だてを講ずれば、子どもは必ず答えようと頑張ると確信できた。しかし、友達の前で進んで発言できない児童がいるのも事実である。各学年での指導事項を明確にし、計画的、継続的に指導し、すべての児童が表現することの楽しさを味わえるようにしたい。

3 その他参考となる事項

曽爾村立曽爾小学校Webページ <http://www3.vill.soni.nara.jp/sonijs/>

1 実践内容

子どもたちの学力低下が問題にされるようになってから、「基礎・基本の定着」を図ることが話題となった。計算練習やプリント学習を繰り返すなど、知識・技能を高める取組もあるが、それだけでは十分とは言えない。考え方や意欲といった観点にも「基礎・基本」があるはずである。授業で大切にしなければならないのは、問題解決の基礎となっている「考え方」ではないだろうか。多様な方法の中にも一貫して共通した考え方があることに気付いたり、「また、出てきた。ここでも使えるね」というように、以前に出た考え方をを使うと新しい問題が解けたりするところが、算数のおもしろさ、よさであり、大切にしたい「基礎・基本」である。これらを重視した授業を展開することによって、子どもたちが、自ら問題を解決していこうとする意欲を高め、論理的に考える力を身に付けることができると考える。



また、いろいろな情報から学び、他者の考えにも耳を傾け、そして判断していく力などを身に付けさせるためにも、集団で解決していく授業を大切にしなければならない。

主題にせまるため、授業では、次のようなことを大切にし、取り組んできた。

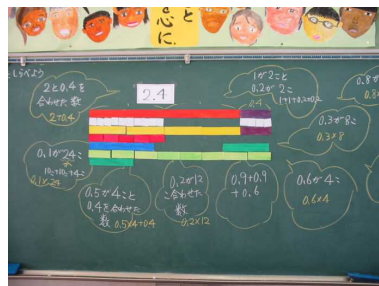
(1) 多様な考え方が出やすい教材の工夫

① キズネールの色棒の活用

キズネールの色棒とは、長さがちがう10色の色棒から構成された教材である。数の構成がとらえやすく、数を多面的に見ることができる教材である。

この教材で、1年「数の合成・分解」や4年「小数のしくみ」、5年「分数のしくみ」などを学習した。

1年では、10までの数の関係に目を向け、そこから足し算や引き算を考え出そうとした。4年では、ある小数（例えば2.4など）を色棒で表しながら、小数の相対的な大きさを考え出したり、さらに、小数の計算に発展させたりすることができた。5年では、子どもたちが難しいとする割合分数の意味が視覚的に理解でき、操作しながら分数の性質を見つけたりすることができた。この教材は、かけ算やわり算の理解にも有効である。



② 身近な題材を使った教材

次のような問題を実際に撮った写真からイメージさせ、既習事項を使って問題解決した。

森先生の身長は、160 cmです。大仏の高さは、16 mで、大仏殿の高さは、48 mです。

今、大仏殿の高さを60 cmにして、模型を作ることにしました。

この大仏殿に合わせると、大仏や森先生は、どのくらいの高さになるでしょう。

問題解決している過程で、「倍関係」だけでなく、「比」の考え方や「拡大縮小」の表し方にも触れることができた。

(2) コミュニケーション力を身に付ける工夫

1年生においては、

表のように、子どもたちに具体物を操作して表現させることから取り組んだ。そして、学習が進むにつれて、自分の分かりやすい表現方法を使うようにしていった。ただ式と答えを出すだけでなく、考

計算の意味を理解する	① お話のとおりブロックを動かそう。 ② お話をしながらブロックを動かそう。 ③ 式のとおりブロックを動かそう。
計算の仕方を考える	④ どうやって計算したか説明しよう。 ⑤ 友達の説明どおりに動かしてみよう。 ⑥ 自分のわかる図を書いて説明しよう。
計算に習熟し活用する	⑦ いろいろな問題を作って出し合おう。

え方を表すにはどうすればよいか、どのように表すことができるか、と問いかけをし、表現力を身に付けるようにした。

高学年では、出た考えが正解かどうかだけでなく、さらに、その考えの根拠や妥当性などを問い返すことによって、子どもたちは考えを修正したり、深めたりすることができた。教師の介入の仕方や支援の仕方によって、コミュニケーションも変わってくるようになった。

＜重士＞

1枚	10枚	全体
4.7g	47g	47kg

$4.7 \times 100 = 470$
 $47 \times 100 = 4700$
 $10 \times 100 = 1000$
 $1 : 4.7 = \square : 4700$
 $\square = 1000$
 $4700 \div 4.7 = 1000$

(10枚の重士) A 1000枚
 何倍か
 比
 (1枚の重士)

2 成果及び課題

- コミュニケーションを大切にすることによって、意味の交流ができ、概念的な学習ができた。その概念が次の新しい学習の既習事項となるので、学習が進みやすかった。
- 答えが正解かどうかより、「どうやって求めたか」「他の解決方法はないか」といった思考過程中心の授業が多くなり、多様な解決方法の学習ができた。したがって、子どもたちも学習したいくつかの解決方法を用い、簡潔に問題を解決しようとした。
- 文章題が苦手という子どもが少なくなった。
- 「それ、ちょっとわからないけど」といった発言もできる雰囲気から、算数に対する子どもたちの構えが和らぎ、算数への苦手意識がなくなったようである。
- 理解しているのは発言している子どもだけでなく、聞くことによってコミュニケーションに参加している子どもも多く、よく理解していた。
- 学級の子どもたち同士の関わりが多くなり、人間関係が深まったように思われる。
- 「何を」「どのように」コミュニケーションさせるかを考えた授業の構成が大切である。
- コミュニケーションを方向付ける発問の工夫が必要である。

分野番号1 小学校 学習指導の部

なかまとともに運動を楽しみ、心と体をひらく体育学習を通して

橿原市立畷傍南小学校 教諭 前田 善彦

1 実践内容

私は、体育の授業を通して運動好きな子にするのと同時にしなやかな心と体をつくろうと考え、また体育学習でなかまに関わることにより、よりよい人間関係づくりができるものと考え、体育を学級づくりの柱として研究・研修を積み重ねてきた。体育学習において、子どもたちが今までできなかったことができるようになる喜びを感じ、なかまといっしょに運動する楽しさを感じ、また体育をしたい・もっと運動したいと感じることができるよう体育の授業づくりを進めてきた。県小学校体育研究会の理事として体育科指導法研修会等に参加し研修を深めるとともに、陸上担当として県陸上記録会の運営を担い、そこで得た指導法を本校児童の体力向上に生かすよう取組を重ねてきた。



(1) 児童の実態

本校児童の体力テストの結果や実態を見ると、柔軟性や瞬発力などの体力の低下が見られ、運動する子・しない子の二極化がはっきりしていた。学校生活の中でのけがが多く見られ、けがを回避するしなやかさが劣っており、体育学習のより一層の充実が必要であると考えた。また、健康や食に関する学習を充実させることで生涯を通じて健康・安全で活力ある生活を送る基礎となると考えた。平成17年度より校内の体育研究主任として校内研究をまとめる役割を担った。

(2) 校内組織づくり

まず組織づくりを行い、「体育授業研究部」「体育調査研究部」「体育環境整備部」を設置し、全職員がいずれかの部に所属して研究・研修に取り組んだ。

① 「体育授業研究部」

ではなかまとかかわる体育授業の在り方や体育授業での「集合の仕方」「場づくり」「学習カードの活用」「ルールの作り方」「指示や支援の言葉」といった細部にわたる基本的指導事項を検討し、全職員が共通理解して授業を行うようにした。また

2007年2月

項目	具体的内容
① 用具の準備、片付け	・授業時間内で行う。 ・体育係だけでなく、全員でする。 ・準備、片付けの時間を計ることも効果的である。 ・体育館のマットの置く場所を決める。(壁に明示する)
② 集合の仕方	・かけ足で、すばやく集合。 ・グループで整理する場合。 ・暗黙に集合する場合(指導者が見える、壁がわかる範囲) ・どこに、だれを中心に集まるか。 ・運動場の場合、太極の向きを考慮する。
③ 集合時の関与姿勢	・体育座り、指導者に注目して聞くこと ・ボールを握るなどしない、しめるなどない。 ・常・・・ボール運動、陸上運動、水泳、ダンスバリン、体づくり運動、器械運動、表現運動 ・常・・・「ピ」集合 「ピツ」注目・立つ 「ピツ」握る
④ 笛、タンバリンの活用	・タンバリン・笛を「シャカシャカ」集合 ・明確「ピ」注目・立つ 「タンバリン」握る タンバリン・学校に9つ
⑤ 服装・くつ	・前日の朝からして「自給」で ・マット運動の「つば付き自備」は、つばを後ろにかぶる。 ・体操服の上着は、体操ズボンに入れる。 ・体育館シューズは、体育館まで持って行って体育館ではきかえる(学校の体育館体育のとき)
⑥ 運動場、体育館への移動	・体育館への移動は壁面から壁面まで体育館まで移動する ・体育館からの壁面に戻るときも壁面である。 ・運動場への移動は、休み時間の外遊びとの関係で壁面への移動は難しい。個々に移動するので、運動場の「どこ」に集合かをはっきり指図しておく。
⑦ 場づくりの工夫(用具の使い方)	・用具、器具の特性をわかるとともに、身近にあるものを使っていることも。(例・タンボール車の「リール」など) ・どんな場でも、どんな動きや運動をさせたいのか、というねらい ・学習カードは具体的なめあて(「がんばる」ではなく)を書かせ、指導者が確認しておく。 ・個人のみならず、チームのめあて ・めあて①「は、もっている力で楽しむ」 めあて②「新しい技や工夫をしてチャレンジする」
⑧ めあてのめたせ方	

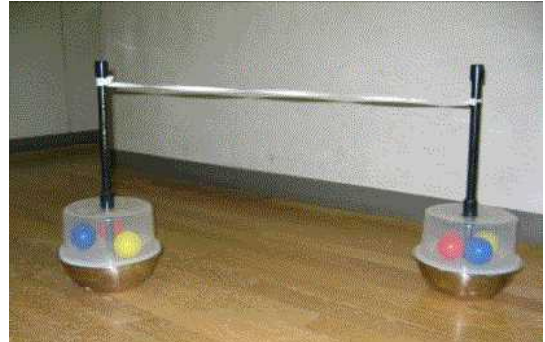
⑧ 学習カードの活用	・体育ノート・ファイルをつくり、学習カードを貼る ・めあて、作戦、振り返りなどを記入 ・個々にもたせて行く、または、グループのかごに入れて持って行く ・学習カードを、データとしてFD等に集めておく。 (学年別または領域別)
⑨ 準備体操・整理体操	・準備体操 本時の主運動に使う体の部位を中心に全体で、または、グループで ・整理体操 けがや怪しいところはないか
⑩ 安全面の配慮	・場づくりにおいて、用具器具は正しく準備されているか、使われているか ・自分の位置よりも高度なめあてをたてていないか(器械運動等) ・コートや場の大きさ、配置(ボール運動・基本の運動)
⑪ ルールの作り方	・ボール運動で、始めは、最小限のルールを決める。 ・活動していく中で、アレンジ・修正の時間をとり、ルールの工夫をし、追加・変更していく。 ・ルールに応じた、チームの作戦を考えさせる。 ・全体が動いている時間だけでなく、個々の運動量を確保する。 例え、リレーでは、常に誰かが走っているが、一人の運動量は1周だけである。 ・1時間の体育授業で汗をかかせる運動量を確保する。
⑫ 指示の与え方	・指示をするために集合するまでの集まる場所 ・指導者の立ち位置、全体が気配できる位置。
⑬ 支援の言葉(声かけ)	・言葉、声援の言葉かけをよそよそしく。 ・「がんばれ」「うまくでき」だけでなく、具体的にどこがよかったかを
⑭ 評価のあり方	・毎時間の継続、学習カードの記録から ・どの瞬間を、どの時間を、どれだけの人数を評価するのかが、最大の「はじまり」「はつらつ」に到達 ・器械運動では、自分の技をカメラで撮影し、その場で出来栄を評価できるように活用する。 ・表現運動では、動きをイメージするために、單元のはじめにビデオを再生すると効果的である。
⑮ BGMの活用	・運動に応じたBGMを活用する。 ・BGMが時計がわりに使うこともできる。(1試合1曲)
⑯ 掲示物	・移動式黒板を利用して、本時のねらいを示す。 ・ルールを示し、確認する。 ・体育館黒板は、場づくりをするときに活用する。 ・マット・結び帯などの技を強て示すと、児童がわかりやすい。

また各学年で校内研究授業に取り組み、研究協議を行うことで指導法の向上を図った。

② 「体育調査研究部」では、スポーツテストの結果から本校児童の体力の実態を把

握した。また、朝食アンケートの結果から、朝食を食べてこない児童が多いという本校の実態を把握し、食育指導を進めた。具体には、保護者向けに「食だより」を発行したり、食に関する児童・保護者への講演会をもったり、栄養士の方に来ていただいたりして児童への食の指導にも取り組んだ。

- ③ 「体育環境整備部」では、運動する意欲を高める環境づくりを行った。楽しく安全に運動するための教具を作成したり開発したりした。ゴム跳びやハードルとして使用する「おきるくん」を自作し授業で活用した。また、体育倉庫を整理整頓し、授業がスムーズに行えるように工夫した。さらに休み時間に楽しく遊べるよう遊具のペンキ塗りなどの作業も行った。また、なわとび週間やかけ足週間、たてわり遊びを設定し、外遊びを活性化させる取組も行った。



(3) 校内研修を深める

体育の授業づくり、指導法の向上をめざして、校内授業研究に取り組んできた。平成18年度には各学年で体育の公開授業を行い、平成19年度1学期には低・中・高ごとに公開授業を行い、その都度研究協議をし、県教育委員会事務局保健体育課井上正司指導主事から指導助言をいただき研修を積んできた。

(4) 近畿小学校体育研究大会会場校として

以上のような3年間の取組を、平成19年11月の近畿小学校体育研究大会の会場校として全学年において体育の公開授業を行い、近畿各府県から来校された約600名に授業を参観していただいた。また、本校の3年間の取組をまとめた研究紀要を作成し、取組を発信することができた。

2 成果と課題

楽しい体育の授業づくりを研究した結果、今まで以上に児童が進んで運動し、運動を通してなかまとより関わろうとする態度が育ってきた。休み時間に今まで教室や校舎内で過ごしていた児童も自ら、また友達に誘われて運動場に出て遊ぶ姿が増え、頭部や病院に行かなければならないけがが減少した。運動好きな子を育て、その結果として体力を高め、よりよいなかま集団が育ってきた。

また朝食抜きの児童が激減し、児童だけでなく保護者の意識も高めることができた。しかしまだおやつ程度の不十分な朝食で登校している児童も見られ、保護者と連携しながら今後も引き続き取組を進めていきたい。

そして、学校・職員全体で取組を進めた成果として、今まで体育の授業が苦手であった教員が「体育の授業はこんなふうに進めたらいいんだ」と苦手意識をなくし、全職員が研修を深め、指導法を高めることができたことは、大きな成果であった。

分野番号2 小学校 生徒指導の部

より多くの目で子どもたちの指導を ～ 教職員間の共通理解を大切にする生徒指導 ～

桜井市立安倍小学校 教諭 米田 紘子

1 実践内容

(1) はじめに

本校で10年目を迎えた。赴任した当時は児童の荒れもあり教職員の共通理解がなかなかできなかった。学級の問題も教師の力量の問題に、また家庭の教育力の低さに原因を求めがちだったように思う。全教職員がつながること・保護者とつながることが、児童を変えていく第一歩と考え取り組んできた。2・3年たつと、「学校が明るくなってきましたね。先生の笑顔が増えてきましたね。」と保護者の声を聞くようになった。教職員がつながることで心の余裕ができ、それが笑顔となり保護者の心に伝わったのではないかと。「子どもは変わる。」と実感できた時だった。



(2) 生徒指導を進める上で大切にしながら全教職員で取り組んできたこと

- ① より多くの児童とかかわることで、学校が変わっていく。
 - 全校児童に積極的に声をかける。
 - ・ あいさつなどを通して学級以外の子どもたちとも積極的にかかわりを増やしていく。そのことが学級での指導や分団指導に生かされる。
 - ・ 以前担任した児童への声かけも大切にする。また、その後の様子や成長を現担任に聞く。問題行動が気になる児童にはさりげなく理由を聞いてみる。成長した児童には賞賛の声をかける。その時の様子を現担任に知らせるようにする。
 - 学級・学年にとらわれず、全校児童を全教職員で指導する。
 - ・ 他の学級・学年の児童であっても、問題を見つけた時点ですぐに指導する。指導内容については担任に話しておく。他学級や他学年にかかわる問題については、必ず複数で話を聞く。(場合によっては、生徒指導主任・人権教育主任・管理職に報告する。)
 - ・ 学校のきまりについてなど指導の基準を全教職員が共通理解していなければ難しい時がある。1つ1つ確かめ合いながら指導を進める。
 - 徹底させたいことは一斉指導する機会を多くもつ。
 - ・ 全校朝礼などの機会に、生徒指導主任や週当番などから指導する。(持ち物、服装、髪色、学校のきまりにかかわることなど)
 - ・ 全教職員が同じ考えで指導していることを、児童に理解させるようにする。
 - 教職員間の共通理解を強める。
 - ・ 問題行動、問題発言などについて気付いた時点で、なるべく早く全職員におろし共通理解していく。(職員朝の会・職員会議など) 1つの学級の問題として抱え込まずに、学年・管理職・生徒指導部・全職員におろしていく。
 - ・ 指導困難な学級がある時は、他の教職員がなるべく教室の前を通り、担任や児

童に声をかけるようにした。担任をサポートできる体制を作るように努力した。

② 教職員の個性や特技を生徒指導に生かそう。

教職員もいろいろな個性をもっている。児童の接し方や指導方法も様々である。また、教科指導でも得意分野が違う。その1人1人の個性や特技を学校生活に生かすことで、より多くの教職員と児童を結びつけることができる。例えば、

- ・ ものづくりの得意な校長先生に、縄跳びジャンプ台やジャンボじゃんけんの道具を作ってもらった。子ども達は大喜びで使っている。
- ・ 科学実験や体育・英語・焼き物作りなどが得意な先生に校内ゲストティーチャーとして教えてもらう。など、児童がより多くの教職員と触れ合うこと・助け助けられる教職員関係は生徒指導に大いに役立つと考える。



③ 保護者・地域の方とつながろう。

- 家庭との連絡を密にとり、小さなことでも気軽に相談してもらえる関係づくりをする。
 - ・ 保護者の我が子を思う気持ちを大切にするとともに、担任も1人1人を大切に思っていることを、いろいろな場や方法で伝えていく。
 - ・ 問題行動については、同歩調で注意してもらえるように努力する。
- 登下校見守り支援スタッフや学校安全会議推進委員との連携を大切にする。
 - ・ 登下校時に児童に声かけをしてもらう。問題行動については、学校安全会議などで出してもらう。支援スタッフの方には、毎年お礼のプレゼントを渡すように児童会で取り組んでいる。
 - ・ 学校安全会議では、年1回校区安全点検ウォーキングをする。通学路や公園などの危険箇所や人通りの少ない場所を点検して改善に取り組んでいる。このウォーキングには生活安全部の保護者も参加するので、保護者や地域全体で児童を守っていこうという意識が高まる機会となっている。

2 成果と課題

10年前本校に着任した時、体育館に集まった子どもたちの私語があまりにうるさく壇上から当時の校長先生が「静かにしなさい。」と大声を出したのを思い出す。委員会やクラブの活動場所から抜け出す児童を追いかけたり、職員朝の会の時は週当番が1人校内を見回ったりしていた。しかし、今、目の前にいる子どもたちは短時間で並び、静かに話を聞く。日々、小さなもめごとは起こるが、その日のうちに解決することが多い。

放課後になると、職員室ではそれぞれ担任している子どもの話が飛び交う。前担任や養護教諭・専科教諭などが自分が知っている子どもの姿を話しながら「あの子、成長したよね。」「うれしいよね。」と会話が弾む。1人1人の成長をより多くの教職員で喜び合えることが、子どもたちを変えてきたのではないかと思う。

今、児童の大きな荒れを知っている教師が本校から去る中、全教職員がつながり、より多くの目で子どもたちを見ていく大切さを引き継いでいきたい。

分野番号2 小学校 進路指導の部

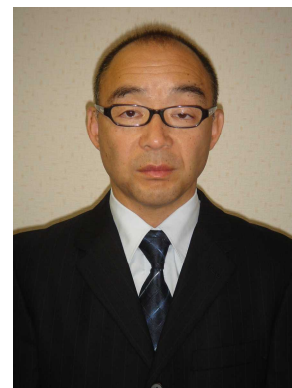
「学習指導の充実」と「学校生活の安定」に取り組んで

～小規模校の特性を踏まえて～

大和高田市立土庫小学校 教諭 中本 剛史

1 実践内容

土庫小学校は、平成22年度全校児童149名（平成23年度145名）と各学年単学級の小規模校である。少人数で全校児童を把握しやすいが、単学級ゆえに6年間児童における人間関係が固定化しやすい環境にあり、小規模校の特性が見え隠れする。人権教育推進担当・生徒指導担当・副教務として、重点的に取り組んだ点について以下に述べる。



(1) 「基礎的な学力の定着・充実」の取組

本校は、「低学力傾向」やつまづいている児童1人1人の基礎学力の定着・充実を図るために、算数は全学年少人数授業により、早期につまづきを発見し即座に指導支援している。

副教務・人権教育推進担当として、全国学力状況調査、県学力テスト（国語・算数）の分析を行い、児童の学力状況の把握に取り組んだ。特に、全体・個人の課題の分析・考察を全職員に提案し、児童の指導に生かしている。しかし、授業時間では低学力傾向児童支援の時間確保は難しいため、朝の短時間の学習タイム（クラスタイム）や希望制の補習学習（スマイル教室）に取り組んでいる。クラスタイムでは、支援が必要な児童を中心に国語（漢字学習等）・算数（計算問題・発展的問題等）の復習に取り組んでいる。

スマイル教室は、全ての児童を対象に希望制で、算数のプリント学習を中心とした個別学習に取り組んでいる。特に、低学力傾向児童には担任を通じて保護者と相談し、参加を促している。今年度は、「学力推進チーム」を編成し、評価・分析を進めているところである。



< クラスタイム（読書） >



< スマイル教室での指導 >

(2) 「児童の進路保障」への取組 ～教職員との連携と学校生活安定への取組～

人権教育推進プランの理念を踏まえ、朝の登校は1日の生活の始まりとして大切だと考える。毎朝昇降口で児童を迎えている。朝一番の表情の観察・挨拶や声かけをすることにより、1日が笑顔で過ごせるように取り組んでいる。そして、不登校傾向児童の把握や登校班に遅れてくる児童の把握を行い、欠席の児童には担任や市教育推進

教員との連携の下、家庭への連絡や家庭訪問を行った。また、遅刻や欠席した児童には、担任と連携をもとにカウンセリング等を行い、スムーズな登校へつながるようにした。生き生きと登校し確かな学力を身に付ける進路保障の取組に傾注した。

また、人権教育推進計画を発展的に見直し、「人間関係づくり」を重点目標に挙げ、研究主任と相談・連携しながら校内研究の課題を明確化した。副教務としてまた人権教育推進担当として、教職員と情報交換を密にし、時には担任と家庭訪問をともにし保護者とのつながりを深め、児童の学校生活の安定に努力した。そして、PTA活動をはじめ補導会活動にも積極的に参加し学年を越えた保護者とのつながりを大切にするとともに、学校と関係団体等のパイプ役を精力的に努めた。



<人権教育推進教員による登校観察>



<市PTA行事『子ども夢街道』準備手伝い>

2 成果及び課題

「基礎学力定着・充実」の取組は、全国学力調査・奈良県学力テストとも、県の平均と同じくらいか若しくは上回る結果が出た。特に算数では、学年により平均で数ポイント～5ポイント以上回る結果も出ていた。基礎的な学力の定着は出来ていると考える。しかし、国語は言語事項・算数では発展的な問題解決に課題が残る為、全職員に提案し今年度へつなげた。

「進路保障」の取組は、平成22年度30日以上欠席が0人だった。毎朝の昇降口での「あいさつ」「声かけ」や、児童の様々な様子について職員間での情報交換と児童や保護者への丁寧な対応の成果だとも考える。担当は変わったが、今年度も朝の声かけに加えて昼休みに廊下に立っての声かけも増やし継続している。2年間、人権教育担当・少人数そして教務として全学年の児童との関わりから、保護者から教育相談を受け、担任との調整をすることにより、人々のつながりの大切さを痛感した。

これらの取組が、今年度の教務主任としての教育課程編成や教育活動の基盤につながっている。どの取組においても全教職員・PTAとの連携・協力は不可欠である。特に保護者の学校教育に対する願いが熱く、学校教育へ協力・支援のあることも書き添えておきたい。そのような学校・保護者・地域と共に歩む学校において教務主任として学校全体の調整役をし、学校長の教育方針のもと全教職員・PTAと連携し、「魅力ある安定した土庫小学校」を目指す要として今後も努力したい。

分野番号2 小学校 生徒指導の部

子どもの実態から始める生徒指導・学級経営について

五條市立牧野小学校 教諭 杉崎 栄一



1 実践内容

< 生徒指導主任として >

(1) クラス写真の活用

「本校に在籍するすべての児童が、我が子である。」の基本的理念をもとに、担任・担当している以外の児童を知り、理解する一助として導入している。

担任している学級や学年の児童は顔と名前が一致するが、全校児童540名となると、どの職員にとっても覚えることが難しい。そのため、各クラスの集合写真を出席番号順に撮り、共有のサーバーに入れ、それを学級の実態や課題を交流し合う会議や何か事件・事故があったときに活用している。

(2) 生活相談部会

勤務校の実態として、個に応じた教育が、今まで以上に必要になってきている。そのため、五條市担当カウンセラー2名・校長・教頭・教務・生徒指導主任・特別支援コーディネーター・養護教諭・該当学年教師によって構成される会議（ケース会議）を立ち上げた。

毎月、各担任からの要請を受けて、課題のある子を中心にカウンセラーに観察してもらい、後の会議で当該児童の今後の指導や学級経営方法を学んだり、関係諸機関との連携を考えたりしている。

(3) あいさつ運動（あいさつGOGO運動）

児童たちに具体的な目標をもたせ、自分たちの達成感をより実感するために、生活委員会の取組としてあいさつ運動を行った。自分自身で評価できるように以下の3点を目標にした。

① 朝の会が始まるまでに

② 大人5人以上・子ども5人以上に（あいさつGOGO [5・5] 運動 ネーミングの由来にもなっている。）

③ 自分からあいさつをする。

クラスの90%の人数が、達成できるとメダルを教室に掲示している。



< 学級担任として >

(1) 毎日5分日記

終業時、毎日自分の思いを日記に綴らせている。1日に会話でコミュニケーションをとれる児童の数は限られるが、日記だと担任するすべての児童の思いを知ることができるからである。そこには、他の児童とのトラブルの内容や、自分が達成できてうれしかったことなどが書かれている。

(2) 百ます計算

朝の会の最後に月曜日を除く毎日、百ます計算を行っている。主たる目的は次の点である。

- ① すき間の時間を作らない。
- ② 自己達成感を味わわせる。(繰り返し取り組むと、より早くより正確に解けるため。)
- ③ 九九が苦手な児童の学力保証。

(3) 情報機器を活用した視覚的支援

掃除場所の各部の写真を活用した掃除マニュアルを作成し、掃除が完了した状態を明確にしている。日々の授業では、分かりやすい板書とともに可能な限り視覚に訴える教材を作成・利用している。また、社会見学や修学旅行等の行事の説明でも静止画・動画を用い、児童が見通しをもてるようにした。



2 成果及び課題

- ・ クラス写真は、すべての職員が児童を知ることに役立っている。緊急時にも、よりきめ細かな対応ができるようになった。次年度は、写真と名前セットのデータベースを作りたいと考えている。
- ・ 教育相談部を始めてから、その児童のもつ良さに焦点を当てるとい方向へ指導方法が大きく転換している。カウンセラーの専門的な見地からアドバイスがもらえ、教員のスキルアップにつながっている。また、関係諸機関や保護者との連携もスムーズである。
- ・ あいさつ運動は、具体的に出来たかどうか分かるようなシステムにしたため、あいさつをする大きな動機付けになった。児童や教員も立哨することで学校全体で取り組んだという達成感も大きかった。しかし、持続性において弱い部分があり、今後の運営方法を検討している。
- ・ 毎日5分日記のおかげで、トラブルは、ほぼ一両日中に解決している。日記の内容を元に保護者とも連携を図ることが出来たためである。また、がんばった内容で顕著なものについては、保護者に連絡し、家庭でも励ましの声かけをしてもらっている。
- ・ 百ます計算は、朝に静かに集中する時間ができるため、1時間目の授業がスムーズに始められるという朝読書と同様の効果がある。また、算数が苦手で学習意欲が低下していた児童も解くまでの時間や点数として伸びが数字で確認できるので、自己の目標をもち意欲的に取り組むことができた。しかし、ある一定のところまで児童の伸びが鈍るので、そのときの目標の転換が難しい。
- ・ 現在では、機器の性能も上がり、教室の照明を落とさずともプロジェクターを使えるようになった。そのため、教室に設置されたホワイトボードにスキャンされた教科書や自作教材が常に写せ、児童が学習する一助となっている。また、時には電子黒板につなぎ、児童が必要な情報を書き入れることもできる。また、課題が早く終わった児童のために、次々と出されるフラッシュ問題を提示することもできる。このように情報機器を使い視覚的支援をすることにより、内容がイメージ出来ず困っていた児童も、課題が早く終わり時間をもて余していた児童も、生き生きと意欲的に活動できるようになってきている。

分野番号5 小学校 特別支援教育の部

生きる力を培う通級指導教室を目指して

平群町立平群東小学校(ことばの教室) 教諭 山本 佐江美

1 実践内容

(1) はじめに

通常の学級に在籍しながら、比較的軽度な障害がある児童に対して指導が行われる通級指導教室の対象者は年々増加してきている。対応人数の限界のため、対象児全員が通級できない現状である。また、通級希望児童だけではなく、就学前の幼児をもつ保護者及び担任からの相談もたいへん多い。通常学級においても支援の必要な児童がいることを認識し、その実態の把握と適切な支援の在り方を探ることが重要である。

通級指導教室担当として子どもたちに、将来、社会で生きていくために必要な力を育てたいと思っている。そのために、保護者と学校及び学級担任とのパイプ役となり、子どもたちの集団への適応がスムーズになるよう、支援したいと考えている。そして、ことばの教室に期待と不安をもちながら通級して来られる保護者の心情を深く理解しながら適切な指導ができるように、下記の取組をしている。



(2) 取組の概要

① 通級指導教室に通う子どもたちに対して

○ 学習面

- ・ 個々の発達のプロフィールを明らかにし、プログラムを作成する。
- ・ 体や手先を動かす活動をすることで心身をリラックスさせ、担当者・保護者、子どもが、共に楽しみながら感覚統合の力を伸ばし、運動力・巧緻性を高める。

○ 行動面・社会性

- ・ 場や状況に合った相手に伝わる返事・あいさつができるように機会を逃さず声かけをする。できた時は、具体的に褒める。
- ・ 個々に合ったタイミングで注意喚起をし、姿勢の保持を心がける。それが、集中力の高まりにも繋がると考える。
- ・ 実際の場の設定（ことばの教室で、伝えるべき話し方の練習をしておき、教室・事務室・保健室等に行き用件を伝える。）・絵カードやソーシャルスキルプリントを活用し、興味・関心をもたせながら、その時の気持ちや表情等、対人関係の具体的な指導をすることにより、コミュニケーション力・自己コントロール力を高める。
- ・ 葛藤場面の克服体験（マイナスの行動を起こさないよう気持ちを言語化・個々に合ったクールダウンの方法を一緒に考える）・自分の行動の振り返り（ことばで、時には文章に書くことで）を重ねることにより、社会性を育てる。

- 懇談の機会を多くもち、保護者の思いや願いを受け止めながら心の安定を図り子どもに応じた適切な支援・具体的な支援を保護者と共に考える。担任とは基本的には学期に一回の担任連絡会をもち、必要な時は指導後の懇談や電話での連絡等、なるべく機会を逃さずに個々の子どもにその都度の適切な支援ができるような連携をとっている。

- ② 自校・他校の特別支援学級に在籍する子どもたちに対して
- ・ 希望があれば、実態を把握するために発達検査等をする。
 - ・ 担任やコーディネーター・保護者に、検査結果を報告し、その結果も含め個々の子どもの得意なところ・苦手な点を理解し、適切な支援の手立てを話し合う。
- ③ 自校・他校の通常学級に在籍し、通級していない子どもたちに対して
- ・ 職員研修等で支援の必要な子どもたちの実態を理解し合い、そのつまずきを探り、支援の手立てを考える。効果的な指導法・具体的な指導法を助言する。
 - ・ 希望があれば、保護者・担任（時にはコーディネーターも）と教育相談をする。必要であれば、子どもに応じた検査をし今後の対応を話し合う。

(3) 事例: 構音障害を主訴として通級していたA児は構音の改善に長期間を要していた。

	学習面	行動面・社会性
つまずき	<ul style="list-style-type: none"> ・ 書くことが遅く苦手で書くことを嫌がる。 ・ 漢字を覚えにくい。 ・ 運動が苦手。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 行動がゆっくりで同学年集団についていけない。休み時間には1人であることが多い。 ・ 自分の思いや考えを伝えにくい。 ・ 臨機応変に対応できない。
考えられる原因	<ul style="list-style-type: none"> ・ 文字がすぐに思い出せない。 ・ 不器用で書字に時間がかかる。 ・ 眼球運動機能が弱く、視写に時間がかかる。 <p>【 W I S C - III実施…空間認知は低くないのに書字に課題があるため視機能検査をする】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 視覚的な記憶は苦手。非言語的な情報(目配せ、身振り、相手の表情変化、声の調子)を取り入れて活用することがうまくできない。 ・ 状況判断ができにくい。(今ここで何が起きているか、他の人はどう感じたり考えたりしているか、自分はどうすればよいかを判断しにくい。あるいは時間がかかる。)
長期目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 書くことへの抵抗をなくす。 ・ 自信をもてるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の思いや考えはことばで表し表情に出す。 ・ 自信をつける。 ・ 相手や場面が変わっても対応できる。
支援の手立て	<ul style="list-style-type: none"> ・ 書くためのヒント…漢字を言語化して書き覚える・手本を近くに置く・注意する所に印や補助線・絵を見て話す→担当者が文に書く→それを視写する。 ・ 書く量…漢字の練習三つずつ ・ 見る力…目のジャンプ運動、目と手の協応トレーニング、イメージ記憶力トレーニング、ひらがな探し、間違い探し、ペグさし、ひもとおし、オセロ、ウノ等 ・ 達成できたことを褒める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 場面を設定し具体的にやってみる(ことば、身振り、表情…担当者の表情をA児に見せる) ・ あいさつ返事は相手に伝わるようにする。 ・ 姿勢良く行動は意識して機敏にする。 ・ 事務室、保健室に行き、用件を伝える。 ・ 担任と密に連絡し合い、場に合った対応の仕方をその都度具体的に説明してもらう。 ・ 関わりのある教員の中でA児のことを話題にし、長所やできるようになったことを知らせる。 ・ 保護者には、ことばの教室及び通常学級での支援の具体的な方策を伝え、その成果を報告する。そして、共に喜びA児を褒める。

2 成果及び課題

保護者と懇談の機会を多くもつことで、保護者の気持ちの安定を図ることができている。それが支援を必要とする子どもたちの苦手な所や困難な点が改善されることに繋がり、更には子どもたちに自信が付き、集団生活への適応がスムーズになる事にも繋がると考えている。

分野番号6 小学校 学校教育目標の具体化の部

いきいきと活力ある学校を目指して ～教務主任として組織マネジメントを考える～

田原本町立田原本小学校 教諭 瀬川 幸子

1 実践内容

本校は児童732名の大規模校である。ここ数年、駅や国道周辺に新しく住宅が建ち並び、若い核家族や母子家庭等が増え、本校に通う児童の家庭環境は一段と多様化している。校内では経験豊かな教員の退職が増え、代わりに新任教師が赴任し、教職員間でも職場環境が大きく変わろうとしている。



このように内外とも変わりつつある学校において、今年度の学校教育目標「いきいきと活力ある学校」の実現を目指し、教務主任としての立場から、どのように学校づくりを進めていくかを組織マネジメントの視点を持つ中で、次のような取組を進めた。

(1) SWOT分析による現状把握

内部環境	外部環境	具体的活動
強み (Strengths) ・児童数が多く、多岐の児童数から、役割分担が明確である。 ・職員構成が安定している。 ・教員の経験が豊富である。 ・地域との連携が密である。 ・交通安全や挨拶等の規範意識が強い。 ・保護者の協力が得やすい。	機会 (Opportunities) ・教育に対して熱心な保護者が多い。 ・見守り隊、地域のボランティア等が活躍している。 ・地域の施設や機関との連携が密である。 ・地域の企業や団体との連携が密である。	・異学年交流活動等（行事連携等） ・幼少連携活動等（生活科等） ・地域の人々との交流（生活科、学習発表会等） ・各（学級）単位の交流（生活科、学習発表会等） ・町（学級）単位の交流（生活科、学習発表会等） ・町（学級）単位の交流（生活科、学習発表会等）
弱み (Weaknesses) ・児童数の増加に伴って、生活環境や家庭環境が変化している。 ・児童の個性や能力が多様化している。 ・児童の生活習慣や学習態度が多様化している。 ・児童の生活習慣や学習態度が多様化している。 ・児童の生活習慣や学習態度が多様化している。	脅威 (Threats) ・児童の生活習慣や学習態度が多様化している。 ・児童の生活習慣や学習態度が多様化している。 ・児童の生活習慣や学習態度が多様化している。 ・児童の生活習慣や学習態度が多様化している。	・児童の生活習慣や学習態度が多様化している。 ・児童の生活習慣や学習態度が多様化している。 ・児童の生活習慣や学習態度が多様化している。 ・児童の生活習慣や学習態度が多様化している。

目標を達成するための教育活動を展開するには本校の現状把握が何よりも大切である。内部環境における強みと弱み、そして外部環境を機会と脅威に分類した。その結果が、本校にどのように影響を及ぼすかを意味付け、校長が提案したビジョンと教職員の思い・考えを融合させ、学校が組織体として機能し、教職員が一体感を感じるような組織力となるように努めていった。

分析を基に、**機会や強みを活かし、弱みや脅威を克服するには、**

- ・ 児童数の多さを生かし、教育活動を学級だけでなく、学年、異学年交流を行うことで、多くの児童とかがわり、それぞれの違いや良さに気付いたり、相手を気遣ったりする児童を育成できると考える。また、地域の人々とのかかわりや幼稚園・保育所との交流では、様々な人との接し方や話し方を体験することで人間関係形成能力を育てることができる。他者に認めてもらったり、賞賛されたりする機会が増えることで、自信や自己有用感を高めることができる。また、PTA、見守り隊の方々の協力により交通安全や挨拶等の規範意識や社会性を地域ぐるみで身に付けていくことができる。今、人間関係が希薄になってきている子どもたちには、学校だけでなく多くの人とのかかわりやコミュニケーション能力が不可欠となる。
- ・ 職員構成において、経験豊かな教員の減少により、全校的な視野に立った考えをもつ教員の動きがスムーズに進まない現状はあるが、研修の機会を増やしたり、学校が力を入れて取り組もうとする重点項目を共通理解する場を設けたりして、経験を生かした教員の知恵と若い教員の考えを融合しつつ、校務や行事の改革を推進する。
- ・ 支援員の配置や通級学級の設置により、きめ細かに児童を支援する体制が作られつつある。また、担任や関係機関での教育相談を保護者の要望に応じて行う等個々

に応じた支援や理解をすることで、保護者が安心し、学校理解も深められると考える。

本校が今求める学校づくりは、これまでの本校独自の教育活動、いわゆる本校の伝統を生かしながら、新たな教職員構成の中で児童や保護者のニーズに合うものにどう変革させるかである。そのためには、学校内部だけでなく、地域の教育力を取り入れていくことを忘れてはならない。

(2) 取組

① 組織体としての学校づくり

校務分掌の部長の参加のもと、弱みであった各部間の連携を強化し、本校が一番達成すべき重要項目を一丸となって考えていく場の設定を行った。そして、学校がもつ課題を教職員全体で確認し、現状を打破できるよう進めた。

② より確かな子ども理解を

教職員の一致した指導体制を目指し、全職員が、気になる児童の共通理解を図る場を設けたり、問題行動のある児童の支援について関係機関との連携によるケース会議を定期的に関いたりするなど、個々の児童理解、支援を充実するよう取り組んだ。また、県や町の支援員を学級や児童の実態に応じて配置し、早期に、そしてきめ細かに児童を観察・支援できる体制づくりを行った。

③ 研修の充実

本年度から、新指導要領が実施され、新たな視点に立った指導が求められている。また、本校では、児童の思いや行動が多種・多様化している中、近年新任教員が増え、教員の力量という面で児童の指導や対応が十分にできない状況が見られる。そこで、十分な学級経営力や教科指導力を付けるため、これまで以上に職員が研修を積み上げ、指導力を強化するための研修計画を各部と連携し推進した。教科研修の充実、問題行動への対応に向けてのケース会議や支援・指導の在り方の研修、情報に関する研修等多岐にわたる研修を計画・実施し、職員の資質向上を図った。

④ 地域の力を活かす

外部（地域・保護者）の意見を真摯に受け止めながら、地域の教育力を生かしていくことが大切である。本校では、PTAの協力は勿論のこと、登下校では、見守り隊の方々にお世話になるとともに、学習活動では、地域の様々な人たちから教わり、学んでいる。（昔遊び、町探検、火おこし体験、福祉センターとの交流等）このような地域の力が学校内部だけでは得られない大きな教育力になっている。

2 成果及び課題

教務主任として、学校運営に参画し、管理職と教職員との連絡・調整という役割を担い日々取り組んでいる。教職員の中には、学級経営だけで精一杯という者も多く、学校が組織体として動くという考えは未だ十分に浸透していないが、学校の弱みを克服しながら、若い教師が増えつつある教職員構成と地域人材の活用という強みを生かし、児童にとって今何が必要なのか、どんな力を付けたいのかを教師間で考え合うことができた。今後も、常に学校全体を把握し、目標達成に向けて企画推進していければと考える。

3 その他参考となる事項

学校組織マネジメント研修～すべての教職員のために～（モデル・カリキュラム）

マネジメント研修カリキュラム等開発会議 文部科学省 平成17年

1 実践内容

英語学習における課題の1つに、家庭学習の充実がある。週3、4時間の授業の中だけで、外国語である英語を理解し定着させることは困難であり、授業と家庭学習を効果的につなげなければならない。家庭学習の定着を図り、それを通して、やがては自律的な学習者となるように育てていくにはどのような手だてが有効であるかを明らかにしてみたい。



(1) 自主学習ノート

家庭学習を促す取組として自主学習ノートに取り組みさせた。柳井他（1994）によると、自主学習ノートを使う取組は、生徒に楽しくかつ達成感をもたせ、学習への自主性と学習習慣を築かせることができる。また教師が生徒とノートを交換することで生徒理解を進めることもできる。自主学習ノートを使い、英文をたくさん書き、読む練習をさせることで、授業における聞き、話す活動と連動させ、さらに生徒の英語による自己表現力と英語力の定着を図ることができるのではないかと考えた。

(2) 自主学習システム

生徒は自分で選んだ学習課題によってノートを作成する。学習課題はあらかじめ教科通信によって生徒に提示する。自分独自のものに取り組みんでもよい。週2回、ノートを朝の会で提出させ、その日の内に添削し、終わりの会で返却するようにした。

学習課題には、テストや次の授業に直接結びつくAメニューとして、教科書本文の暗写、授業でおこなったパンプラクティスを書くというドリル練習、定期テストのやり直しなどがある。学習への興味関心を高めるBメニューには、英語の歌の日本語訳、英単語しりとり、同音異義語や単語、連語練習、教科書本文を絵で表すといったものがある。さらに学習ストラテジーを図るCメニューには、自分の自学を振り返ったり、明日の自学の計画をたてたり、先生に聞いてみたいことなどがある。このように、課題の数は合わせて70近くあり、生徒はその中から自由に自己選択して取り組むことができる。

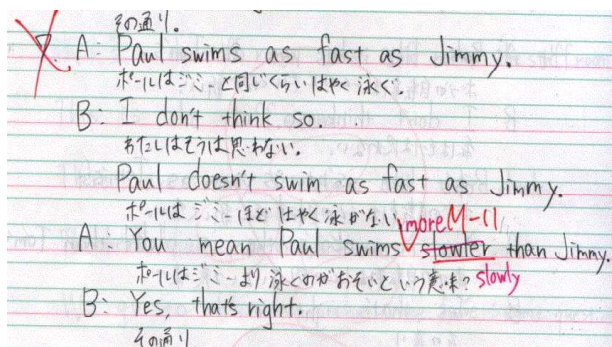
自主学習ノートを使うことで、生徒はパンプラクティスの短文練習から、徐々に自己表現を含む対話文を作り、さらには、英文エッセイ・スピーチ原稿、英語で家族・友達紹介、英語絵日記などのまとまった英文を書くという取組を進めることができた。



新出語を絵であらわす

(3) 誤り訂正と評価

誤り訂正というフィードバックが、生徒の英語力向上に重要であることは言うまでもない。たくさん間違いから、なぜ間違っているのかに気付き、どう訂正すればよ



more の用法が未定着 M-11 と記入

いのかを自分で考える習慣を付けていきたい。間違っている箇所に教師が正解をそのまま書いてしまうと生徒の力は伸びない。そこで間違っている箇所には下線をし、『自己表現お助けブック』にある「文法カルタ」の一覧にある記号を記すようにした。文法のドリル学習において、生徒は間違っている英文を正解するまで何度も訂しながら練習する粘り強い学習を進めるようになった。

指導と評価を一体化することも大切である。授業の中ではペアワークで聞き、話す活動を十分に行い、自主学習ノートで書く練習を進めた。それぞれの課題で合格すると、ポイントとなり評価に組み込まれる。また生徒がよくやる間違いは定期テストの問題として出題した。授業と家庭で取り組んだことが評価に反映され、自分が頑張ったことが認められると、生徒はやる気を見せ、さらに高い取組を見せていった。

2 成果と課題

生徒たちは予想以上に楽しく自分のペースで取り組んだ。優秀作品は教科通信で紹介し、アイデアをシェアするようにした。わずか2か月で3冊をやりあげる生徒もいた。特に英文絵日記やスピーチの原稿作りは生徒の書く力を伸ばし、文法への注意を向けさせる効果もあった。「いろんな自学をしたけど、スピーチ原稿を書くのが一番むずかしかった。でもやりがいがあった！」「英語がおもしろいと感じてきた！」とあるように、どの生徒も続けることの困難さ以上に達成感を得たようである。

授業での様々な活動と家庭学習がつながる自主学習システムのおかげで、生徒たちは自主的に取り組む姿勢を身に付けていった。毎日の点検作業は本当に大変ではあるが、生徒の学習の進み具合とつまづきを個人的にチェックし、細かなアドバイスを与えることができた。また生徒1人1人とのつながりを作ることもできた。生徒たちも仲間のノートから学ぶことも多く、教師と生徒、また生徒同士の信頼関係を築くことができた。

放課後、英語教室にはノートをチェックしてもらうために生徒の長い行列ができる。自主学習システムのおかげで、生徒たちは意欲的に粘り強いがんばりを見せている。ただし、すべての生徒が熱心な取組を示したわけではない。彼らをいかにして取り組ませるかが今後の課題である。

生徒がどこまでわかっているのか、どこが分からないかを知るために自主学習ノートはとても有効である。彼らに適切な助言を与え、英語の学力を伸ばすとともに、学習そのものへの頑張りを支えることができたことはとても大きな成果である。教師のきめ細かい働きかけによって生徒は必ず変わる。授業の中でよい生徒像をつくり、自主的な学習者を育てるために、自主学習ノートの活用は効果的な方法の1つである。

3 その他参考となる事項

柳井智彦、田尻悟郎、大鐘雅勝。『自ら学ぶ子が育つ英語科自学システム』。東京：明治図書出版，1994。

「お助けブック編集委員会」『自己表現お助けブック』東京：教育出版

1 実践内容

問題行動への対応に迫られる「消極的」生徒指導から、問題行動を未然に防止し、生徒の自己指導力を促す「開発的・予防的」生徒指導を目指していき、そのために、生徒が何かを成そうとする動機を重視することを根本に据えた。以下4点にその経過を述べる。



第1は生徒指導の体制づくりである。生徒の現状を知るために、可能な限りの言葉かけを繰り返し、彼等の集団内での位置を知ingことを重視した。学期末の三者懇談以外に、担任と生徒本人の二者で行う「教育相談」の期間を2回設定している。また、生徒情報の共有をするために、学年を越えて環境や状態の変化についての報告、連絡を遺漏無きよう促した。定例の家庭訪問とは別に、保護者や地域の保護者的立場の人材とも懇談をもち、意志疎通を図った。さらに、職員に対しては、職員打ち合わせの時間の指導報告はもとより、生徒への接し方、懸念材料への共通理解事項などを必ず話題にした。少数のベテランと多くの経験の浅い職員で構成されている本校の実態に即しながら、「昨年どおり」の見直しに力点を置いた。具体的成果には、生徒指導の「基本方針」を全面的に見直して本年度の重点課題を確定した。続いて取組の基本的な考え方について、共通理解を図るための連絡・報告体制づくりを行った。

第2は、教員の意識改革である。日々の学校生活の細部に至るまで確認と理解の徹底を図り、指導の基準を生徒にも再確認させた。服装規定などは更衣時期を前に、その都度確認をした。経験豊かな職員には、指導方法の「振り返り」とマンネリ化に陥っていないかどうかの自己検証を促し、経験が少ない教員には、事例に対する指導の考え方や接し方等を提案、助言をした。また、分掌間、学年間の連絡調整を行い、学校が組織的に機能するよう働きかけた。

指導の重点として、学校長の進める「みそあじ」（「み」身だしなみを整えさせる、「そ」掃除を徹底する、「あ」あいさつをしっかりとさせる、「じ」時間を守らせる）を、常に意識した指導をすることとした。職員も生徒とともに動き、声をかけ、設定の校時よりも先に現場に居る、などの必然性をタイムリーに発言した。

第3は、生徒の育成である。集団づくりや、生徒に自己の将来観をもたせることが日々の実践に問われる。「通信」を通じて体験や考えを語ったり、全校集会において、指導的内容と納得して行動させるための「理由」を添えて説いた。制服の「着こなし」や「薬物の乱用防止」等に関する講師を招聘し、第三者的立場からの話を聞かせることで啓発を行った。特に支援を要する生徒については、部活動に参加させることで集団行動の基本と思いやりの心の育成をした。次いで、生徒会活動に参加させ、募金などのボランティア活動の実施と校則の見直しを行い、校内美化やあいさつ運動を主導させた。生徒の自主性と企画・行動力を向上させることは今後も欠かせない。その方策として、学校中庭の美化工事を共同で行い、生徒と教員がともに汗を流すことで一体感と達成感を

得るように取り組んだ。

第4は、地域との連携である。地域社会との間では、生駒市地域ぐるみの児童生徒健全育成事業推進委員会また青少年指導委員会の活動に参加して情報交換を行い、登下校指導や地域の大型商業施設等巡視について学校と各種団体、自治会と協力している。市内の他、市外でも本校区隣接の中学校とも情報の共有と活動の連携を行っている。

2 成果及び課題

昨年との比較では、問題行動は激減し、重度のものはほぼ皆無になっている。その要因として、問題の背景を分析し、当校が組織的に多様な対策を講じたことが挙げられる。再びの「荒れ」た状態を避けるべく、日々の予防のために、教師集団として「開発的・予防的」生徒指導を行うことが必須である。生徒に言い訳を与えてしまう、甘やかしにつながってしまう等の生徒対応は、危機意識の欠如の現れで、これからも絶えず教師性を磨くことは欠かせない。

突出した「荒れ」を表出させている生徒は現在いないが、多くの「普通に見える」生徒が抱える問題の発見に努め、立場、もち場に応じた職員の対応と教師集団としての向上のため、共通理解と指導基準の確認、多様な指導方法の研修が継続的課題となる。落ち着いた、それでいて活気のある学校にしていくべく、これからも提案、発言、行動を続けていきたい。

生徒指導主事として発信、調整的役割の立場を忘れずに職員が一枚岩となれる職場・教師集団づくりを進めていきたい。

3 その他参考となる事項

- ・ 平成22年3月 奈良県教育委員会発刊
「小・中学校生徒指導ガイドライン」～子どもの規範意識の向上を目指して～
- ・ 生駒市地域ぐるみの児童生徒健全育成事業推進委員会
会長は生駒市長で、生駒市内の各中学校区ごとに、保幼小中各校園、育友会・PTA、自治会、青少年指導委員会、民生児童委員会、子ども会など各種団体の参加により、まさに「地域ぐるみ」で児童生徒の健全育成事業を行っている。

1 実践内容

「運動を楽しめる集団は生活態度に落ち着きがあり、学習意欲も高い。」これは中学校保健体育の授業での生徒の姿から感じてきたことである。保健体育の授業を進める中で、学力二極化の要因の1つが「運動を楽しめるか否か」にあるのではないかと考えた。コミュニケーション能力が低い生徒が小学校時の友人や教師の支えを失うといった中1ギャップ現象の顕在化とも相まって、「運動を楽しめる生徒の育成～運動の楽しさを体得させる授業実践～」が中学校保健体育科の最重要課題となった。



そこで、「体育の授業において、運動の合理的な実践を通して運動の楽しさや喜びを体感し、知識や技能を身に付け運動を豊かに実践することができるようにすれば、生活態度に落ち着きが生まれ、学習意欲を高めることができる」という仮説を基に実証研究を行った。

(1) 前任の大規模校では、運動を楽しめる集団とそうでない集団の二極化が進んでいた。

そこで「運動を楽しめる集団づくり」に向け「球技」の授業を展開した。生徒にとって一番馴染みのある題材が「球技」である。また、チームを組んでの活動ではコミュニケーションが不可欠であるとともに、生徒のアイデアが生かせ、集団づくりには最適なものである。生徒の実態に基づき、ゴール型・ネット型・ベースボール型のゲームを系統立てて位置付け、基本的な技能の習得を分かり易くした。また、チームの目標設定や練習計画立案に際してはコミュニケーションを通じた人間関係の構築を目指した。また、勝敗を競う楽しみや喜びを味わえるように、習得技術の段階に応じた特別ルールを設けたり、ハンディキャップリーグ表を作ったりしてモチベーション維持に工夫を凝らした。「球技」での「運動を楽しめる集団づくり」は生徒の生活態度を落ち着かせるに十分な効果があると確信できた。

(2) 小規模校である本校への転勤を期に、運動が楽しめる学年集団・全校集団づくりへ

と目標をシフトさせ、学校行事の体育大会での集団演技で「運動を楽しめる集団づくり」に取り組んだ。会議を重ね、年次的に『南中ソーラン』に取り組むことにした。初年度は第1学年で、2年目は1、2学年が合同で演技することにし、生徒同士での教え合いを支援した。また、振り付けの一部を生徒に創作させ、名称を『吉中ソーラン』とした。アンコールにも後押しされ、『吉中ソーラン』を踊り上げた生徒たちは充実感と達成感を味



おい、生活態度に落ち着きが出た。また、学校全体の雰囲気が良い方向に変化した。続いて、寒さの中で長い距離を走りとおす「耐寒訓練」は生徒が苦手とする行事であるが、個人カードを活用し、走った距離が一目で分かるようにスタンプを押した。また、走行距離をランキング表にして毎日掲示し、モチベーションを高めた。これだけのことであるが、少し工夫を加えることによ



って、欠席又は見学生徒は減少し、生徒個々の走行距離は明らかに伸びることになった。運動が楽しめる場をつくり、運動を楽しめる集団づくりを行うことによって、積極的な学校生活を送ろうとする生徒を育むことができると確信できた。

2 成果及び課題

前任校での保健体育授業実践を含め、本校での『吉中ソーラン』や「耐寒訓練」等の学校行事での実践を通して、「運動を楽しめる集団をつくることによって生活態度に落ち着きが生まれる」ことを実証することができた。しかし、「運動を楽しめる集団は学習意欲が高い」という実証は課題として残ったままである。この実践報告は「中学校」におけるものであるが、「運動を楽しめる集団づくり」については小学校との連携が必要不可欠である。

本年度、本町の人権教育研究会の分科会において、幼児・児童・生徒の実態について意見交換を行い、幼稚園、小学校、そして、中学校の教員が同じ目的に向かってベクトルを合わせて研究していくことの大切さを確認することができた。「体力の向上及び学習意欲の向上に繋がる実証研究を行いたい」との思いを抱いている。

3 その他参考となる事項

吉野中学校メールアドレス yoshinochu@kcn.jp

分野番号1 高等学校 学習指導の部

Brush up Time（忘れかけている知識を復習する時間）の取組について

奈良県立二階堂高等学校 教諭 岡本 雅至

1 実践内容

本校は、平成21年度・22年度に文部科学省の教育課程研究指定を受けた。研究主題は「学ぶ意欲を高める指導の改善『義務教育段階での学習内容の確実な定着を図る教育課程及び指導方法の研究・開発』」である。これは、義務教育段階での学習における小さなつまづきが原因となって高等学校の学習へ円滑に移行できなくなっている多くの本校生徒に「学ぶ喜び」を体感させ、主体的に学習に取り組む態度を養いつつ、学習の基本となる言語活動を充実させたいという思いからである。



(1) Brush up Time

平成21年度、校内に研究グループを立ち上げ、1年生において義務教育段階での学習内容の確実な定着を目指した教材『Brush up Time』を作成し、2学期からは放課後10分間の時間を設定し、モジュール方式で取組を開始した。22年度は、始業時間を10分早め、朝のSHR前に『Brush up Time』と名付けた時間を設定し、全学年で取り組んだ。研究指定が終了した23年度も取組を継続している。



1年生は、各教科等の学習のための基本的な語彙の習得・筋道の通った文章を書くための口語文法・正しく筆記用具を持ち、字形を整えて書く書写・小学校の算数計算問題・中学校1年生の英文法と英単語を主な内容としている。2年生は、語彙の習得・古典文法・文学史・書写・中学校1年生の数学・中学校2年生の英文法と英単語（数学と英語は、23年度は1年生と同様）を主な内容としている。3年生は、進路実現に向けて一般常識問題・適性検査問題・小論文対策等である。各学期ごとにB5版の冊子にして渡しており、3年間で8冊（3年生は2冊）の教材を行うことになる。

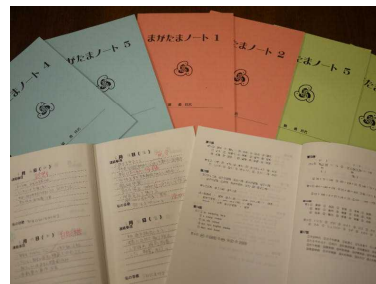
これらの教材は、国語科3名、地歴公民科1名、数学科2名、理科1名、英語科2名からなる「Brush up Time推進委員会」が中心となり、作成を行った。その際、目の前にいる生徒の姿を常に頭に浮かべながら教材を作ることを大切にされた。全員が前向きに取り組めるよう、誰でも10分間で出来る教材にするため予習と復習が同時に出来るものとした。また、生徒の自尊感情を考慮して名称にこだわった。その結果Brush up（磨き直し）という語を使用した。これは本校の校章である「勾玉」や本校のスローガン「学び合い、共に輝け！二階堂！」にもマッチするものである。

当該時間の指導は各クラスの担任・副担任の二人態勢で行っている。4月当初に職員研修を実施して共通理解を図り、生徒に対しては教材の表紙裏に使用方法や意義を書き、事前にHRで指導を行ってから実施した。1年生1学期の表紙裏の内容は、「『Brush up Time』とは、『忘れかけている知識を復習する時間』という意味をもちます。皆さんが今まで学習してきた内容をもう一度思い出してもらい、高校での学習をスムーズに進めていくための基礎となる力をつける時間です。」というもので、こ

の後に具体的な内容や使用方法を載せた。教材は毎週末の提出を義務付け、主に副担任が点検し、学期末にはA B C段階評価を行い、生徒に通知している。

(2) まがたまノート

平成21年度の『Brush up Time』開始と同時に、『まがたまノート（勾玉は本校の校章）』と名付けた連絡ノートを用い、連絡事項の聴き写しをさせた。ノートには「私の目標」のコーナーを設け、聞く力・書く力を育成するとともに、目標をもった生活を送れるようにした。表紙裏には、「このノートは、朝のS H R時に使用します。



実社会においても、メモを取り、計画的に一日を送ることは非常に重要な能力の一つです。」と記し、人の話を聞くこととメモを取る訓練であること、そのほか使用方法と注意事項等を載せている。これも毎週末の提出を義務付け、主に副担任が誤字の点検訂正し、学期末にはA B C段階評価を行い、生徒に通知している。

2 成果及び課題

平成21年度は、1年生のみ放課後10分間の取組であったものが、22年度から登校時間を10分早め全学年での取組になった。当初は遅刻の増加が心配されたが、遅刻数は減少し（23年度は更に減少）、問題なく全校での取組として定着した。23年度1学期の生徒アンケートによると、『Brush up Time』・『まがたまノート』とも、全学年で90%の生徒が前向きに取り組んでいると答えている。また、22年度の教員へのアンケートによると、ほぼ全員が『Brush up Time』・『まがたまノート』を継続していくべきだと考えている。学校生活のスタートが落ち着くことにより1時間目からの授業においてもよい影響が見られ、主体的に学習に取り組む姿勢が見られるようになった。『まがたまノート』も、聞く力・書く力の育成や漢字についての知識の拡充などの成果が見られた。

課題としては、『Brush up Time』では、教材のさらなる改善が挙げられる。高校の各授業における活用を一層進めるためにも、3年間の指導方針を確立して生徒・教員に提示することが必要である。『まがたまノート』は、指導者側の意識が非常に重要である。単なる連絡ノートではなく、社会で役立つ訓練であることを生徒に常に伝え、定期的な点検が欠かせない。平成23年度は全学年課外学習の扱いとしているが、学校設定科目として行うことも視野に入れながらこの取組を継続していきたい。

3 その他参考となる事項

平成21年度・22年度に文部科学省において研究発表を行い、23年8月に奈良県高校人権教育研究大会で、10月には奈良県人権教育研究大会でも実践報告を行った。また、『中等教育資料』平成23年9月号の「さわやかアングル」のページに『Brush up Time』を始めとした本校の取組が掲載された。そのため依頼があった場合には教材や資料をお渡ししており、実際に教材を活用していただいている学校もある。今後も、『Brush up Time』・『まがたまノート』の取組を更にBrush upし、本校の取組として定着させていきたい。

二階堂高等学校Webページ：<http://www.nps.ed.jp/nikaido-hs/>

1 実践内容

(1) 統合校ワーキンググループ

奈良工業高校と奈良商業高校が、県立学校再編計画により統合されることとなった平成15年より、統合ワーキンググループの一員として、奈良工業高校の代表として、統合相手校の奈良商業高校に何度も出向き、細部にわたって検討を重ねた。

具体的には、統合校のコンセプトである「ものづくりとビジネスを共に学べる学校」の創造を目指し、多様な進路に対応するカリキュラム（スペシャル・グローバル・プログレッシブといった選択授業のグループ化）の提案等、統合校の根幹となるものから、校歌・校章・制服などの選定、内規・規則の原案づくりからクラブの数や内容、体操服の選定等まで、様々である。



(2) 情報工学科の創造

ワーキンググループが集められた当初、情報系学科の創設を担当する者がなく、当時、奈良工業高校の機械科で情報に関連する教科に携わっていた私がある任を負うことになった。どのような教育内容にするか、カリキュラムは、実習内容は、使用教材は、そしてどんな実習設備・備品が必要か、ほとんど専門的知識のない私が、職務を進めなくてはならなくなった。知らないことや分からないことだらけであったが、統合の日程は待ってられない。連日連夜、休日も出勤し、先進県や先進校の資料を参考に、本校独自の情報工学科とはどうあるべきか調べた。

特に苦慮したのは、実習内容を決定しないと設備・備品が決められず、予算要求が出来ないことである。県下初の工業系情報科である情報工学科のあるべき姿を考え、特色ある学科づくりを進めるにあたり「ロボット・制御技術・光ファイバ通信」を実習内容での特色に置くことにした。私が導入を進めた最新鋭の設備は、中央職業能力開発協会が主催する「若年者ものづくり大会」ロボットソフト組込み部門での仕様（上位大会には「技能五輪全国大会」さらに「国際大会」もある）となる遠隔ロボット制御実習装置、多くのアクチュエータを揃えたFA実習装置やシーケンス制御装置、情報通信には欠かせない光ファイバに関する基礎から応用までの実習装置、そしてコンピュータ室には、あらゆるOSについての学習環境を生徒へ提供するために、Windows OS実習室の他に、県内では例のないMac OSのコンピュータ室も導入した。県立学校企画調整



【MacOS使用のコンピュータ室】 室の

指導の下、細部にわたって調整を繰り返し行い、最新鋭の施設・設備をもった全国に誇れる実習棟が完成した。

カリキュラムについても、情報工学科独自に考えたものに「選択実習」という実習教科を取り入れた。「選択実習」とは、一年間を通して一つの内容について実習を行い、生徒の興味・関心を深めさせるため導入したものである。これにより生徒の専門知識や得意分野をより一層深めることができ、引き続き大学や専門学校へ進み、継続的な学習をしようとする生徒への対応ができると考えた。

2 成果と課題

奈良朱雀高等学校情報工学科の学科長を任され、まず最初に取り組んだのが、新学習指導要領の先行実施のため、進路指導の一環として本科2年生でのインターンシップを実施することである。平成19年度は全員で1日の実施であったが、本年度は、2年生全員が12事業所に分かれ5日間のインターンシップを行うまでとなった。

資格・検定についても、全国でも高校生の合格者は数名程度と言われている情報配線

施工技能検定の「3級技能士」に取り組んだ。約1か月間の補習と、県内企業の方からの実技指導を計画し、昨年度には受験を希望した14名全員の合格を果たした。

また、統合校ワーキングで私が提案した一つに、各学科の直属クラブの創設がある。学科の学習内容を深く研究し、その成果を発表会やコンテストや大会に参加し、学校の名を全国に広める広告塔的役割を担うものと考えていた。そこで本科直属のクラブとして「情報研究部」を創部した。今年度の情報研究部は、本科に導入され実習で使用している最新鋭の設備を使って参加した「若年者ものづくり大会」のロボットソフト組込み部門全国大会で、全国3位に入賞を果たした。また、第1回「ケータイ甲子園」に出場した際には、携帯電話についての研究だけでなく、学校や生徒に何か役立ち、身になる内容をと考え、携帯電話の画像撮影機能で美化活動の事前事後を撮影し、科内でコンテストを行って地区予選を通過し、全国大会では本科で学習した動画編集を駆使したプレゼンを行い特別賞に輝いた。その他、各種ロボットの大会や映像コンテストにも出場・出展し、奈良朱雀高校情報工学科の位置を全国的にも確固たるものにしつつある。

先進的にインターンシップへの取組を行ったことや、多種多様な資格・検定に多くの合格者を出せたこと、全国のコンテストや大会で入賞を果たしたことは、生徒に自信と達成感をもたせることになったと実感している。そして、生徒自らが興味をもったものへの探求心を培い、適切な進路選択に貢献できたと考える。これからも、情報工学科の生徒として誇りと愛校心をもって巣立つ生徒を育て続けたい。



【3級技能士に14名が合格】

3 その他参考となる事項

奈良県立奈良朱雀高等学校のWebページ <http://www.nps.ed.jp/ns-hs/>

1 実践内容

現在、私は高取国際高校で教務部長を務めて2年目である。

本校は、3つの国際科をもつ専門高校である。また、帰国生徒の受入校でもある。英語を中心とした3学科の独自性をいかに出していくか、そのための教育課程、時間割編成の工夫が必要とされている。国際英語科及び国際コミュニケーション科については、英語に特化したカリキュラムであるが、国際文化科は、文系・理系への様々なバリエーションが選択できるカリキュラムになっている。そのため帰国生への取出し授業も含め、複雑な講座編成となっている。



さらに国際理解教育部が中心となって行われる姉妹校派遣や受け入れ、異文化体験発表会における教育成果の全校共有化、また、帰国生係を中心とした海外にルーツを持つ生徒の学力保障等を学校全体の教育活動の中に適切に配置することが求められる。教務部員また部長として取り組んできたことは、具体的に以下のような事項である。

- (1) 年度末の限られた時間で講座編成を完成させるため、毎年講座授業の見直しを行い、生徒にとって有効かつ整理された講座編成に改良してきた。帰国生への準備は、帰国生係との連携を強化し、合格者説明会後の聞き取り調査から取り出し授業の実施計画や日本語指導及び母語保障のための非常勤講師の日程調整を早い段階で行い、取り出しの授業そのものにも無理のない時間割編成の実現に努力した。また、前教務部長から引継いだ取り出し授業編成のスキルを、確実に次の担当者に継承していくよう留意している。昨年度より、本校では新任教員の研修も加わり、時間割編成がより難しくなったが、無事に実行することができた。



取出し授業の風景

- (2) 海外姉妹校との交流活動や留学生の受入れに関しては、歓送迎行事や校外における半日又は全日研修実施の際、担当者の授業変更等時間割上の配慮を行い、プログラムがスムーズに実行出来るよう努力している。また、海外帰国者の随時編入及び海外訪問団の受入れ、また異文化体験発表会等の関係行事の日程や校時設定に適切かつ柔軟に対応するよう心がけている。
- (3) 新教育課程への移行に関しては、国際科専門高校としての独自性を明確にするとともに、ここ数年定員が埋まりにくくなっている現状を打破するため、特色選抜の内容

変更も含め、校長・教頭の指導の下、生徒にとって魅力的で、分かりやすい教育課程を編成すべく仕事を進めている。その際、各教科への十分な情報提供、基礎プラン提示後の十分な意見のすり合わせに留意している。

(4) 教員の指導力向上のため生徒による授業評価を実施した。計画の立案、アンケート処理システムの構築と改良を行い、初年度に比べ早い時期での評価実施を実現し、その結果を年度内の授業に反映させることができた。

(5) 成績処理システムをより汎用性の高いプログラムに変更し、誰が担当者になっても対処できるよう改良した。

(6) 入試事務に関しては、特色選抜から2次募集まで約1か月にわたって関わる状況が続いている。年度末の業務と並行して大変厳しい日程となるが、綿密な計画の立案と学校全体の緊張感の維持に努めてきた。

以上、仕事を進めるうえで、先生方への丁寧な説明で理解と協力を得ること、教務部の先生方の適切な役割分担で力を発揮してもらうこと等を重視してきたつもりである。今後も日々の業務の確実な遂行に努力していく所存である。

2 成果及び課題

19年間の長きにわたり教務の仕事に携わってきたことになるが、その間紆余曲折を経ながらも教務を通じて学校運営に関われたことは、私にとって財産である。教務の仕事は年間絶え間なく、業務を卒なく遂行して当たり前であり、どの学校のどの教務部長も淡々と努力している。私が特に顕著な成果を上げたと考えることはできないが、ここまで続けられたのは、諸先生方の指導と援助あつてのことで、それを得られたのは自らを佳とすることができるかもしれない。

本校教務部長の課題として、

ア、国際科専門高校としての特色を十分に発揮できる体制の維持

イ、新教育課程への移行に関して、より明確な方向性の提示と説明の徹底

ウ、教務部としてのチーム力向上

エ、日常業務における精度の向上

等が挙げられ、今後も全力を傾け、取り組んでいくつもりである。校内の様々な意見や要望を調整し、学校教育活動の中核を担う教務部にとって、最重視すべきは「生徒の利益」であるという原点からぶれることなく、粘り強く努めていきたいと考えている。

3 その他参考となる事項

高取国際高等学校Webページ <http://www.nps.ed.jp/takatori-kokusai-hs/>

分野番号5 特別支援学校 特別支援教育の部

奈良西養護学校におけるセンター的機能について ～特別支援教育コーディネータ委員会の取組より～

奈良県立奈良西養護学校 教諭 武田 あさ子 他9名

1 実践内容

(1) 方針

- ① 本校のセンター的機能の充実に向けて、各分掌から発案されたセンター的機能に関する取組について、実施時期の判断、役割分担、校内調整等の検討を行う。
- ② 現在実施している学校全体のセンター的機能に関する取組について、校内に情報を発信するとともに整理を行い、それぞれの担当分掌を明らかにし、役割分担を明確にする。
- ③ 本校のセンター的機能に関する関係機関からのニーズの把握に努める。



(2) メンバーと会議の開催時期

校長、教頭、事務長、学部主事、教育相談部長、副部長、進路指導主事、進路指導部長、研究部長、人権・交流教育部長とし、会議は年2回を基本とし、必要に応じて招集する。小委員会（各分掌部長、及び関係者）は、懸案事項に応じて開催する。

(3) センター的機能に関する取組

特別支援学校のセンター的機能に関する取組については、従来、学校見学会、体験学習、教育相談等、行っている。また、センター的機能に関する取組は、特定の分掌のみが担うのではなく、学校全体で担っていると考えられる。

(4) センター的機能に関する外部機関との連携・連絡会議

特別支援教育コーディネータ、または教育相談部、進路指導部、研究部、人権・交流教育部等が参加している。

(5) 主な取組

- ・夏期教育相談会の実施…夏期休業中を利用して、校区内の保育士、教員を対象に指導上の悩みや実践上の課題について一緒に考えていく。
- ・研修会の案内…研究部研修、進路研修、人権教育研修等、本校で全体研修として取り組んでいるものを校区の幼稚園、小・中・高等学校に案内する。
- ・体験研修の実施…本校校区の小・中学校教職員を対象に、本校の児童・生徒と実際に関わりながら、一日の流れの中で、特別支援学校の教育を理解していただく。
- ・休日参観の公開…休日参観の案内を、福祉サービス事業所、校区の幼稚園、小・中

学校、近隣の保育園に案内し公開していく。

- ・教材展示…本校の教材を展示形式で公開する。方法としては、夏期休業中に、校内で一定期間、展示する。地域の先生方に対しては、夏期教育相談会や公開研修、また、市の担任者会、学校見学会等で来校された機会を利用し、教材展示を見学できるようにする。本校の教職員についても教材研修の機会とする。
- ・地域の学校との連携…地域の教員とのつながりを積極的にもち、ニーズを探る。(奈良市、生駒市の特別支援学級担任者会への積極的な参加と情報発信)
- ・適正な就学指導の推進…特別支援学校は本来、重度の障害のある児童生徒の学校であることを踏まえた就学指導を推進する。県の方針に則り、特別支援学校や就学指導の在り方について、就学に関する様々な会議で専門的立場から積極的に発言していく。
- ・校内研修での取組…校内研修の中にセンター的機能に関わる取組を入れていく。コーディネータ委員が得ている情報を校内に積極的に発信する。

2 成果および課題

開校以来、常に地域における特別支援教育のセンター的役割として、「何ができるか」を考えてきた。地域の小・中学校、幼稚園、保育園等のニーズを収集するように努め、また、必要と思われることを前向きに企画し発信し続けた結果、それぞれの取組が充実してきている。

また、高等学校においても「特別支援教育」がクローズアップされている。センター的機能を担う本校として、今年度は高等学校にも本校の講師研修を公開し、また、高等学校の研修会場に本校を提供し、実際に特別支援学校の現場を体験していただくといった取組も行われた。今後もさらにつながりをもつように努め、連携を深める中で、ニーズを汲み取っていききたい。

開校4年目となり、本校の教育活動をさらに充実させ、教育力を上げることが、地域の教育力を高めることにつながるということを、さらに全校をあげて認識していきたい。

3 その他参考となる事項

● 主な取組への外部からの参加者数

- ・平成23年度 夏期教育相談会
〈相談件数〉全15件 (保育園2件、小学校10件、中学校2件、高等学校1件)
- ・体験研修
〈参加者〉小学校(1名) 中学校(2名)
- ・公開講師研修
〈参加者〉のべ50名
- ・高等学校人権教育研究会における臨地研修等
〈参加者〉30名

奈良西養護学校Webページ：<http://web1.kcn.jp/naseiyou/>